卒業時に保有する資質・能力と満足度にみる AO 学生と他選抜学生の差異

林　　寛　子
富　永　倫　彦

要旨

本稿は，山口大学の学生が入学時，卒業時にどのような資質・能力を保有し，卒業時に保有する能力は大学で養われたものなのかどうか，また，大学に対する満足度は大学時代のどのような要因が関連しているのかを入学区分別に分析することにより，特に AO 学生の特異性を明らかにしようとするものである。調査結果から，保有する資質・能力に関して， AO 学生は入学時には他の入学区分と比べ特異な層の学生であるが卒業時には入学時ほどの特異性が見られなくなること，満足度に関しては入学区分別の差はなく，満足度が高い学生は資質・能力が大学で養われ，卒業時に保有する資質・能力が高く，大学時代にさまざまな活動に取り組んだ学生であること，そして AO 学生が他の入学区分と比べ，大学時代にさまざまな活動に取り組んだ傾向にあることが明らかになった。

キーワード

入学者追跡調査， AO 入試，資質・能力，満足度，学生生活

１．はじめに

山口大学 AO 入試による入学者（AO 学生）は，これまで 2 期生までが卒業した。AO 学生 1 期生に対し，17年度は卒業時点において社会が求める資質・能力がどの程度身についているのか，学生自身の自己評価と指導教員の評価で試みた。新しい選抜方法によって入学した学生がどのように成長したのかを検証することは容易ではない。そのため，その調査結果だけで AO 入試の選抜の有効性を論じることはできないが，少なくともある程度の社会性を身につけ，他者との関係も極めて良好で，自主・自立性の高い学生集団として AO 学生を位置づけることができる一方で，英語のコミュニケーション能力については AO 学生のアキレス腱のようになっていることが明らかになった。

17年度の調査結果は AO 学生のみを対象として行ったものである。したがって，他の選抜方法との比較において AO 学生の特異性を明らかにし，彼らの優位な資質・能力が選抜時点で発掘できたのかどうかを検証する必要がある。そこで， 2 期生が卒業する18年度は全卒業生を対象として自己評価による調査を試みた。また，全入学者の特性を明らかにするために，18年度から入学時調査を行っている。こうして，山口大学の入学者追跡調査は，従来の在学成績等で行うものから社会が求める資質・能力がどの程度身についているのかを学生自身が自己評価する入学時調査と卒業時調査への体制に変えた。この観点からの他大学における入学者追跡調査の研究事例はなく，新たな試みである。

現在，山口大学の入学区分は前期日程，後期日程，推薦入学，AO 入試，帰国生徒特別選抜などがある。入学者選抜は複数実施され，多様な学生を求めているが，大学で行われる教育は一律である。

本稿では，こうした大学の教育システムの中で，多様化入試の一環として導入された AO 入試による入学者が大学教育においてどのように成長したのか，保有する資質・能力に着目することにより，他の入学区分との比較においてその特異性を明らかにし，AO 学生の優位な資質・能力が選抜時点で発掘できたのかどうかを検証する。卒業時点で保有する資質・能力が在学中に養われたものであれば，それは大学教育の成果であり，なおかつ，その素質・能力を入学者選抜において見抜いたことになると考える。

また，大学に対する満足度は何からもたらされるのかを検証する。つまり，入学区分によっては，第一志望入学者が多い区分もあれば，不本意入学者が多い入学区分もある中で，学生が大学教育において保有する資質・能力をいかに高め，大学への満足はいかなるものなのかを検証する。そして，多様な入学区分の意義を検討する。

以上のことを検証するため，18年度・19年度入学時調査，18年度卒業時調査のデータを用いる。

２．調査の概要

入学時調査，卒業時調査の分析について，入学区分は前期日程，後期日程，推薦入学，AO 入試を用い，帰国生徒などその他の入学区分は省略する。

2．1　入学時調査対象者

入学時調査の対象者は平成18年度入学者2,065名，19年度入学者2,009名である。調査は，学部オリエンテーションや，学科・コースごとに全員がそろう授業等で同一日に配付・回答・回収する形式で実施した。

調査項目は，資質・能力の自己評価のほかに，進学動機について，受験校決定について，大学説明会等の参加状況について設けているが，本稿では資質・能力の自己評価と受験校決定における山口大学を第一志望校に決めた時期についてのデータのみを用い，他は割愛する。回収率，入学区分と入学区分別の性別の割合は表１～表３のとおりである。

表１　回収率

	18年度	19年度
入学者数	2,065	2,009
有効票数	2,011	1,927
回収率	97.4	95.9

表２　入学区分

	18年度	19年度
前期日程	65.9	58.1
後期日程	16.4	21.1
推薦入学	13.0	13.8
AO 入試	4.0	4.3
その他	0.6	2.8

表３　入学区分別性別

	18年度		19年度	
	男性	女性	男性	女性
全体	61.4	38.6	58.8	41.2
前期日程	65.2	34.8	62.0	38.0
後期日程	59.7	40.3	61.9	38.1
推薦入学	45.2	54.8	42.7	57.3
AO 入試	56.8	43.2	53.2	46.8

2．2　卒業時調査対象者

卒業時調査の対象者は，調査時点における平成18年度卒業予定者1,942名である。12月～３月にかけて学部事務に依頼し個別に配付・回収した。学部によっては指定日に集めて実施したところもある。調査項目は，資質・

能力の自己評価のほかに，所属する専門分野，大学の履修科目と高校の教科科目との関連，大学での諸活動，大学に対する満足度がある。本稿では，資質・能力の自己評価，大学での諸活動，大学に対する満足度を分析に用い，他は割愛する。回収率は卒業予定者1,942名に対し有効票1,152票で，59.3%であった。入学区分，入学区分別の性別は表４，表５のとおりである。

表４　入学区分

	全体
前期日程	58.1
後期日程	21.1
推薦入学	13.8
AO 入試	4.3
その他	2.8
合計	100

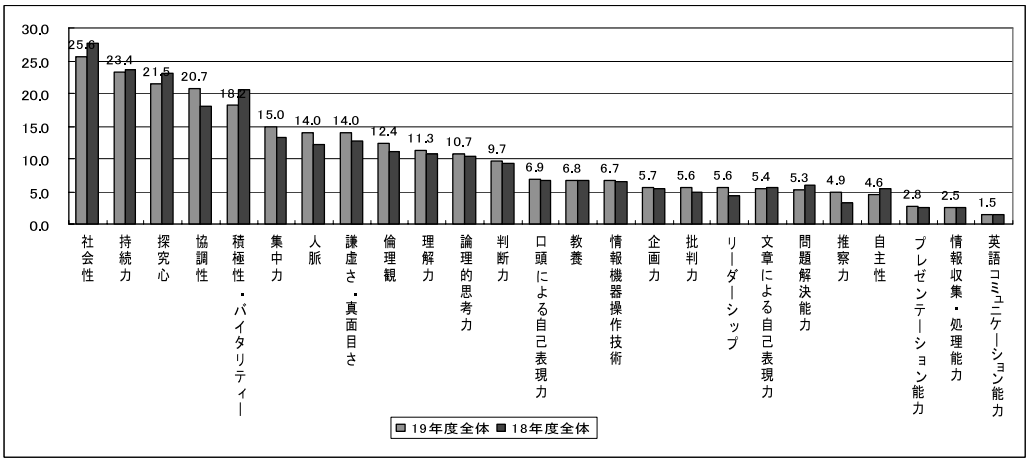
表５　入学区分別性別

	男	女	合計
前期日程	54.7	45.3	100.0
後期日程	50.2	49.8	100.0
推薦入学	49.0	51.0	100.0
AO 入試	44.9	55.1	100.0

３．保有する資質・能力と大学で養われた資質・能力

３．１　入学時と卒業時の保有する資質・能力

入学時調査では，資質・能力を表す25項目について，「自分自身があてはまっていると強く思うもの」を３つ以内で回答を求めた。結果は図１である。２ヵ年とも上位の項目は，「社会性」「持続力」「探究心」「協調性」「積極性・バイタリティー」である。２ヵ年のデータには多少の変化が見られるが，大きな変化とはいえない。このことから上位５項目が山口大学の学生の入学時に保有する資質・能力の特徴といえるであろう。



※19年度の値のみを示す

図１　全体　入学時に保有する資質・能力（複数回答）
（18年度・19年度入学時調査結果）

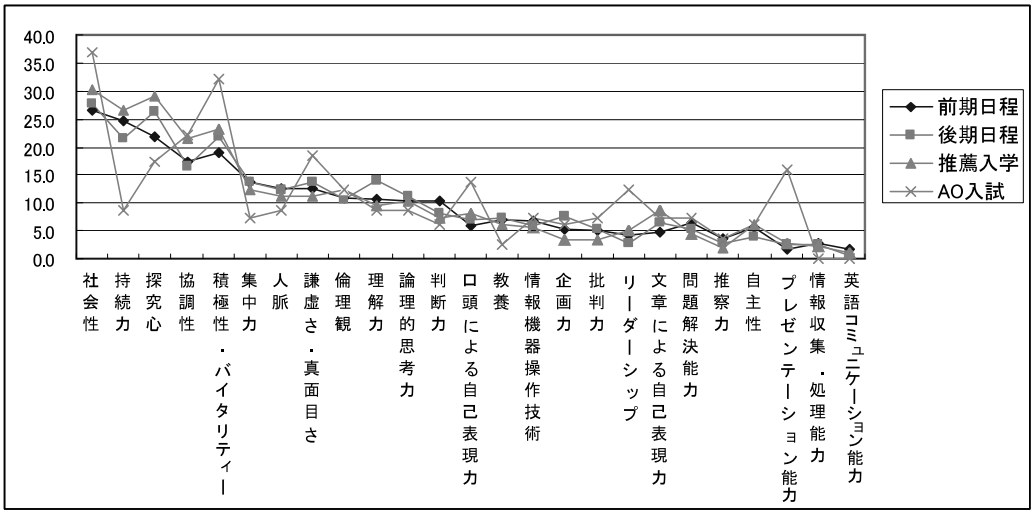


図２　入学区分別　入学時に保有する資質・能力（複数回答）
（18年度入学時調査結果）

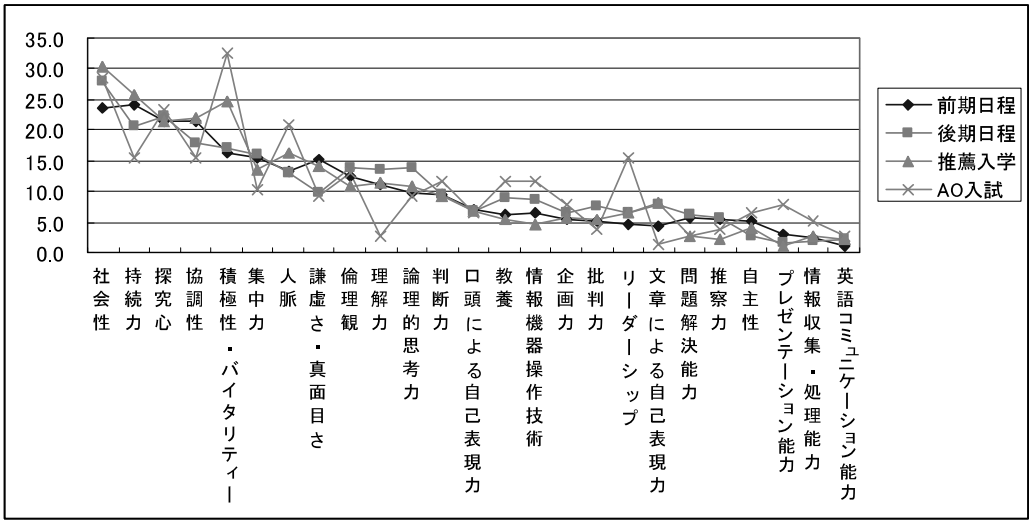


図３　入学区分別　入学時に保有する資質・能力（複数回答）
（19年度入学時調査結果）

それでは，入学時に保有する資質・能力について，入学区分別にどのような特徴があるのだろうか。全体の割合が高かった順に２ヵ年の入学区分別入学時に保有する資質・能力について図２，図３に示した。これを見ると，AO 入試は全体の傾向から大きく外れている項目が複数あることがわかる。他の入学区分は，多少のぶれはあるものの AO 入試ほどの大きなぶれは見られない。２ヵ年を比較すると傾向に違いが見られるが，２ヵ年ともに「積極性・バイタリティー」「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」は他の入学区分よりも優位な資質・能力として表れている。これらは AO 学生の特異性といえる。

以上のことから，AO 学生は他の入学区分とは違う層の学生であること，つまり，多様

な学生を求めた AO 入試の目的は果たされていると見ることができるだろう。また，優位な資質・能力として表れた「積極性・バイタリティー」「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」は，山口大学 AO 入試において全学および学部学科のアドミッションポリシーで強く求めている内容であり，入試の特徴ともいえる。このことから，アドミッションポリシーに沿った選抜が行われたと考えることもできるであろう。

3．2　卒業時に保有する資質・能力と大学で養われた資質・能力

3．2．1　卒業時に保有する資質・能力

次に，卒業時に保有する資質・能力について，入学時調査と同様の25項目について４段階評価「かなりあてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」で回答を求めた。結果は図４，図５のとおりで，「かなりあてはまる」「少しあてはまる」を合算した値を示した。

全体（図４）では，「社会性」「協調性」「倫理観」の順で割合が高かった。これに対して，「英語コミュニケーション能力」は23.5%と最も低い。「英語コミュニケーション能力」以外の24項目は学生本人の主観的評価となるが，「英語コミュニケーション能力」だけは山口大学が TOEIC 教育を導入していることにより，各々が自分のスコアを知っていることから他の学生との比較も可能で，客観的な評価に基づいているものと考えられる。

入学区分別（図５）では， AO 学生の卒業時に保有する資質・能力が多くの項目で自己評価が高いことがわかる。入学区分別で有意差がみられた項目は，「倫理観」**，「探究心」*，「積極性・バイタリティー」*，「論理的思考力」*，「集中力」**，「リーダーシップ」**，「プレゼンテーション能力」***，「英語コミュニケーション能力」**である。（χ^2 検定* P〈.05 ** P〈.01*** P〈.001）これら８項目のうち「英語コミュニケーション能力」以外は， AO 学生が卒業時に保有する資質・能力が高く，「積極性・バイタリティー」「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」は，入学時に優位な資質・能力であった。

本稿の分析で用いている入学時調査と卒業

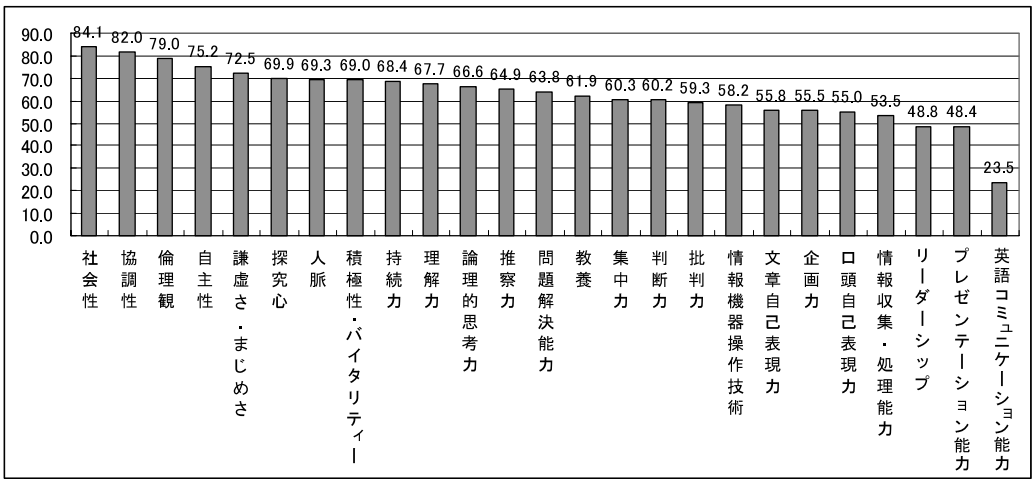


図４　全体　卒業時に保有する資質・能力
（18年度卒業時調査結果）

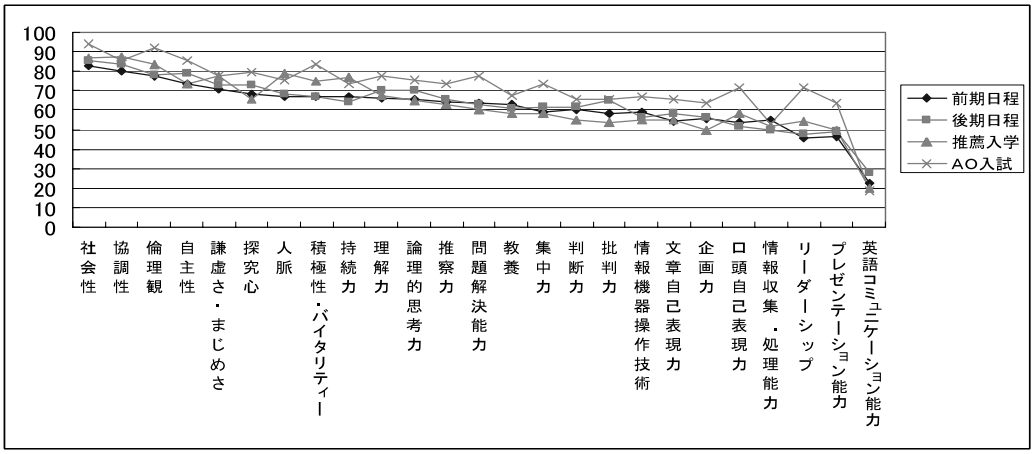


図５　入学区分別　卒業時に保有する資質・能力
（18年度卒業時調査結果）

時調査のデータは，当該入学年度の学生が卒業する年に実施した卒業時調査データではないこと，学生の自己評価であることなどから，学生がどれだけ成長したのか検証することは難しい。

しかし，入学時調査においてAO学生が保有する資質・能力が他の入学区分に比べ突出して優位を示しているものもあれば，劣位を示しているものもあるように，他の入学区分と比べ特異といえる学生層が，卒業時には他の入学区分と同程度に資質・能力を保有していると自己評価していること，さらに，他の入学区分よりもAO学生が保有すると高く自己評価している項目が複数あること，中でも，入学時に他の入学区分よりも優位であった「積極性・バイタリティー」「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」以外に「倫理観」「探究心」「論理的思考力」「集中力」も優位になっていることから，AO学生が大学教育をとおして成長したと考えることができるであろう。なおかつ，成長が期待できる資質・能力を入学者選抜において見抜いたといえるであろう。その意味では，AO入試が相応の機能を果たしていることになる。

3．2．2　大学で養われた資質・能力

そこで，卒業時に保有している資質・能力が大学で養われたのかどうかを検証するために，大学で養われた資質・能力を確認しておく。

大学において養われた資質・能力についても，入学時，卒業時に保有する資質・能力と同様の25項目について，４段階評価「大学では全く養われなかった」「大学ではあまり養われなかった」「大学で少し養われた」「大学でかなり養われた」で回答を求めた。結果は，図６，図７のとおりで，数値は「大学でかなり養われた」「大学で少し養われた」を合算した値を示した。

全体（図６）では，「英語コミュニケーション能力」のみが５割を下回っているだけで，他の24項目は「大学で養われた」という評価が高かった。大学で養われた資質・能力の上位５項目は，「社会性」「教養」「理解力」「協調性」「論理的思考力」であり，全て８割を超えている。

入学区分別の大学において養われた資質・能力（図７）でχ^2検定における有意差がみられたのは，「問題解決能力」*，「文章自己

表現力」***,「探究心」*,「情報収集・処理能力」*,「情報機器操作技術」*,「倫理観」**,「リーダーシップ」**,「英語コミュニケーション能力」*であった。(* P〈.05 ** P〈.01 *** P〈.001)

細かく見ると，入学区分別の差が生じている項目があるが，それほど目立った差を読み取ることはできない。このことから，入学区分に関係なく大学教育はほぼ一律に行われており，全ての学生に教育効果が表れていると評価できるであろう。

本稿で用いている入学時調査と卒業時調査の保有する資質・能力については質問方式に違いがあるため，一概に比較することは難しい。しかし，一律の大学教育システムの中で，入学時には他の入学区分の学生よりも劣位な資質・能力が見られた AO 学生が，卒業時には他の入学区分とほぼ同様，またはそれ以上の資質・能力評価に引き上げられているとみることもでき， AO 学生には成長する潜在的な能力があったと考えることもできるであろう。

これらの結果に基づいて，入学時調査と卒業時調査の保有する資質・能力を同様の尺度で検討できるよう，20年度入学時調査を改善した。

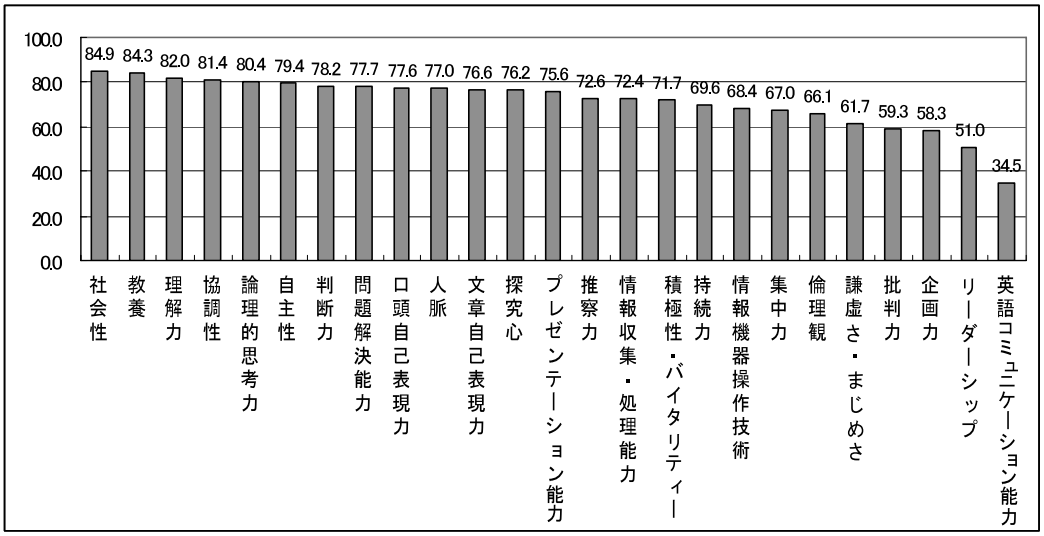


図 6　全体　大学で養われた資質・能力
（18年度卒業時調査結果）

3．3　入学区分と満足度

それでは，学生の卒業時の満足度はどのような要因によってもたらされるのであろうか。

山口大学の学生は，入学区分の違いによって，入学時に山口大学が第一志望であったかどうかに大きな差がある。図 8 は，入学区分別にみた第一志望に決めた時期（18年度入学時調査結果）である。

AO 入試・推薦入学は，合格した場合，山口大学への入学が確約できる者を求めていることもあり，それぞれの入試が行われる直前までには山口大学が第一志望である。しかし，前期日程はセンター試験の結果で山口大学を第一志望校にした者が58.4%であり，不本意であったと考えられる「該当なし」が7.7%である。後期日程においては，不本意であったと考えられる「該当なし」が62.6%である。明らかに，後期日程で入学してきた学生に第

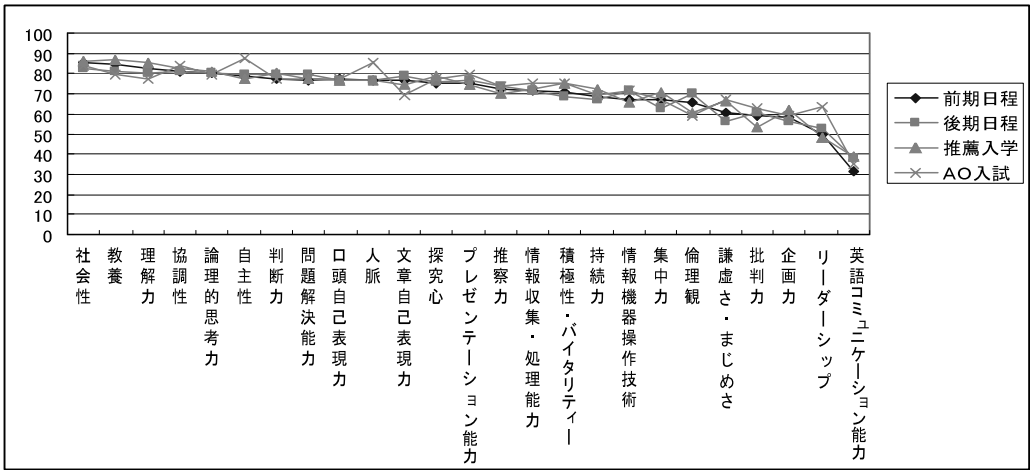


図７入学区分別　大学で養われた資質・能力
（18年度卒業時調査結果）

一志望として入学してきた学生は少ない。

このような背景をもって大学生活を送った卒業時の満足度は図９のとおりである。入学区分別では，AO入試による入学者の満足度が高く，「大変満足している」「どちらかといえば満足している」を合算して93.9%であった。これに対し，後期日程による入学者は77.3%で，他の入学区分と比較して満足度が低い。しかし，入学区分別のχ^2検定における有意差は見られなかった。

入学時，志望どおりであったか，不本意入学であったかの影響は考えられそうだが，卒業時調査において，入学時に志望どおりの入学であったか，不本意入学であったかは聞いていないことからこの影響を明らかにすることはできない。

そこで，満足度と大学教育の成果としての卒業時に保有する資質・能力，大学で養われた資質・能力，大学への満足度，入学区分との関連を分析する。

卒業時に保有する資質・能力，大学で養われた資質・能力と満足度の関係では，英語コミュニケーション能力以外の24項目でχ^2検定における有意差が表れた（表６）。それぞれの項目について，卒業時に保有していると

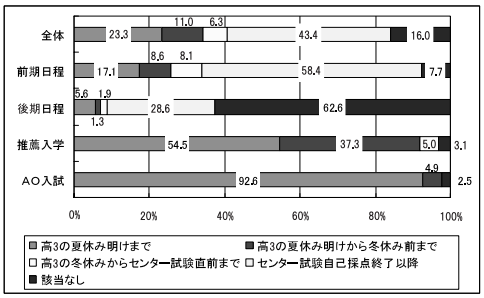


図８　入学区分別　第一志望に決めた時期
（18年度入学時調査結果）

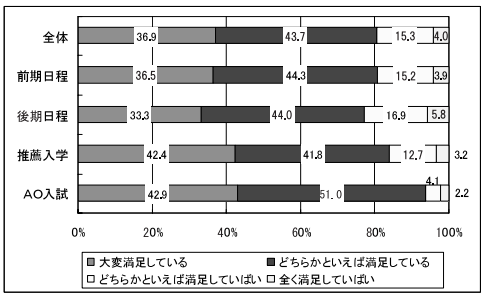


図９　入学区分別　卒業時の満足度
（18年度卒業時調査結果）

自己評価した学生，そして大学で養われたと自己評価する学生の満足度が高いことが明らかになった。

卒業時に保有する資質・能力，大学で養わ

表６　資質・能力と満足度
（18年度卒業時調査結果）

	卒業時保有する資質・能力と満足度の有意差	大学で養われた資質・能力と満足度の有意差
社会性	***	***
教養	**	***
口頭自己表現力	***	***
文章自己表現力	*	***
プレゼンテーション能力	*	***
理解力	*	***
論理的思考力	*	***
判断力	***	***
持続力	***	***
集中力	***	***
問題解決能力	***	***
探究心	*	***
企画力	***	***
積極性・バイタリティー	***	***
謙虚さ・まじめさ	***	***
協調性	***	***
倫理観	***	***
人脈	***	***
自主性	***	***
情報機器操作技術	*	**
情報収集・処理能力	**	***
英語コミュニケーション能力	―	―
批判力	*	***
推察力	*	***
リーダーシップ	***	***

（χ^2検定 ＊ P〈.05 ＊＊ P〈.01 ＊＊＊ P〈.001）

表７　卒業時保有する資質・能力数と
大学で養われた資質・能力数
（18年度卒業時調査結果）

数	卒業時保有		大学で養われた	
	N	%	N	%
0	15	1.3	18	1.6
1	8	0.7	2	0.2
2	6	0.5	4	0.4
3	12	1.1	5	0.4
4	17	1.5	10	0.9
5	19	1.7	9	0.8
6	21	1.9	9	0.8
7	21	1.9	12	1.1
8	27	2.4	9	0.8
9	34	3.0	26	2.3
10	45	4.0	23	2.1
11	39	3.5	32	2.9
12	52	4.6	30	2.7
13	75	6.7	45	4.0
14	80	7.1	51	4.5
15	57	5.1	56	5.0
16	64	5.7	54	4.8
17	62	5.5	82	7.3
18	68	6.1	65	5.8
19	51	4.5	76	6.8
20	54	4.8	66	5.9
21	61	5.4	72	6.4
22	54	4.8	70	6.2
23	52	4.6	80	7.1
24	52	4.6	70	6.2
25	76	6.8	145	12.9
合計	1,122	100	1,121	100
平均値	15.7		17.9	
標準偏差	6.1		5.9	

れた資質・能力と入学区分との関係では，有意差は見られず，入学区分が大学教育の成果の有無に影響しているとはいえない。

次に，卒業時に保有する資質・能力について，「かなりあてはまる」「少しあてはまる」と回答した項目数を算出した（表７）。卒業時に保有する資質・能力数の平均値は15.7項目で，大学で養われた資質・能力数の平均値は17.9項目であった。

卒業時に保有する資質・能力数，大学で養われた資質・能力数と満足度の関連は，図10，図11のとおりで，保有する資質・能力数が多い人ほど満足度が高く，大学で養われた資質・能力数が多い人ほど満足度が高い結果となった。

入学区分との関連では，卒業時に保有する資質・能力数，大学で養われた資質・能力数はそれぞれの項目ごとの関連と同様にχ^2検定における有意差はみられなかった。資質・能力の保有数，大学で養われた資質・能力数からも入学区分が大学教育の成果に影響しているとはいえない。

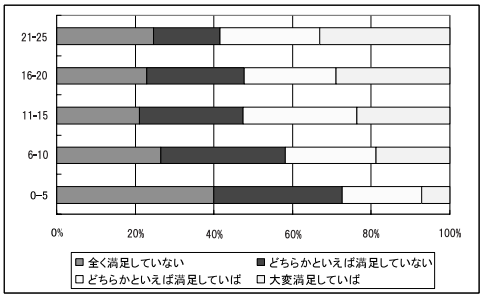


図10　卒業時に保有する資質・能力数と満足度
（χ^2検定　P〈.01）
（18年度卒業時調査結果）

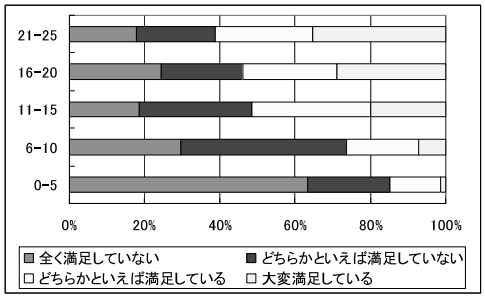


図11大学で養われた資質・能力数と満足度
（χ^2検定　P〈.001）
（18年度卒業時調査結果）

以上の結果から，①卒業時に保有する資質・能力の自己評価は入学区分によることなく，大学において同様に得られた教育の成果であること，②満足度は，入学区分によることなく，大学における教育の成果が高かった学生ほど満足度が高いことが，明らかになったといえるであろう。

3．4　大学での諸活動と入学区分

入学区分は，資質・能力を高めるといった観点からは，あまり影響しないことが明らかになったが，入学区分は学生生活に全く反映されないのだろうか。そこで，大学での諸活動と入学区分の関連を分析してみる。

大学においてどのような活動に取り組んだのか14の選択肢を設け，複数回答で回答を求めた。全体（図12）では，「アルバイト」が最も多く，次いで，「クラブ・サークル活動」である。

入学区分別（図13）では，「アルバイト」「クラブ・サークル活動」「国内旅行」「学会・シンポジウムなどへの参加」「おもしろプロジェクト」「起業」は，どの入学区分もほぼ同様の傾向を示している。しかし，これ以外の項目の「TOEIC 以外の資格取得のための学習」「ボランティア活動」「インターンシップ」「地域自治活動・地域団体での活動」「留学生チューター等受け入れにかかわる活動」等で

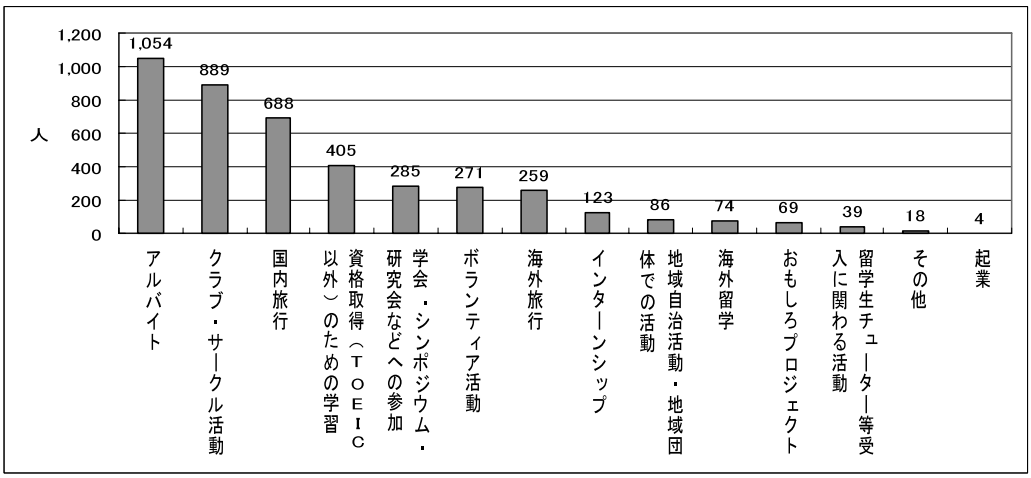


図12　全体　大学で活動したもの（18年度卒業時調査結果）

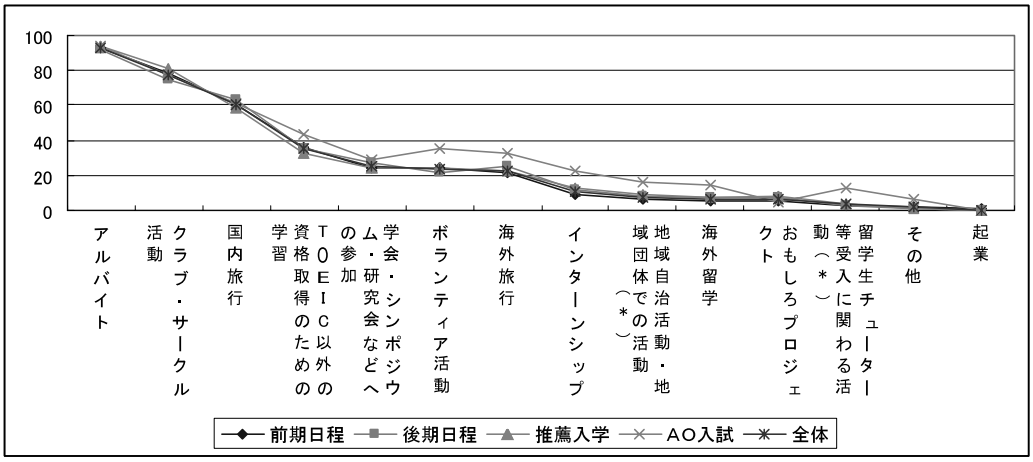


図13　入学区分別　大学で活動したもの（χ^2検定 ＊ P〈.05）
（18年度卒業時調査結果）

は，AO 学生が相対的に高いことがわかる。「地域自治活動・地域団体での活動」「留学生チューター等受け入れにかかわる活動」ではχ^2検定における有意差が見られた。

それでは，大学における活動と満足度がどのように関連しているのだろうか。大学での諸活動14項目について，個人の活動数を算出した。その活動数と満足度の関連（図14）では，活動数が多い人ほど満足度が高い傾向にあり，χ^2検定における有意差があった。そして，活動数と入学区分の関連を見たところ（図15），χ^2検定における有意差が見られ，AO 学生が活動数が多い傾向にある。

つまり，AO 学生は他の入学区分と比較して，さまざまな活動を行い，活動範囲が広く，より積極的な大学生活を送ったと考えられる。だからこそ，図 9 のように AO 学生の卒業時の満足度が高いといえる。

4．まとめ

以上の結果から，まず，入学区分は，入学時に保有する資質・能力に関連はしているものの，卒業時に保有する資質・能力，大学で養われた資質・能力には影響しないことが明らかになった。入学時の AO 学生は，他の入学区分の学生が保有する資質・能力とは異なる傾向が見られ，「積極性・バイタリティー」

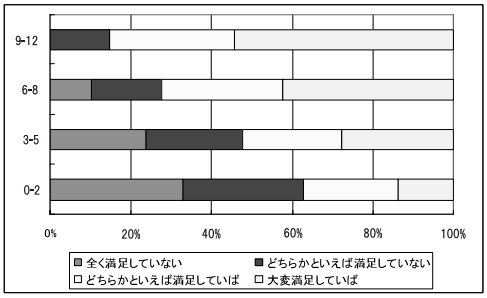


図14　大学での活動数と満足度
（χ^2検定　P〈.001）
（18年度卒業時調査結果）

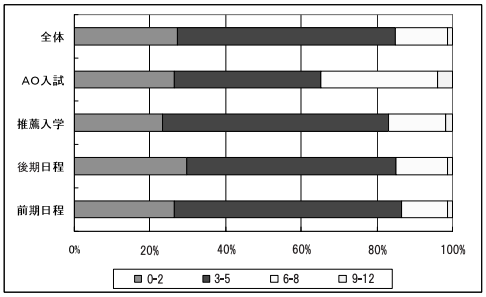


図15　入学区分と大学での活動数
（χ^2検定　P〈.05）
（18年度卒業時調査結果）

「リーダーシップ」「プレゼンテーション能力」が彼らに優位な資質・能力として表れた。このことは，多様な学生を求めたAO入試の目的を果たしているといえるだろう。しかし，卒業時に保有する資質・能力では他の入学区分と同様の傾向を示した。AO学生が大学教育をとおして成長したと考えられる。なおかつ，成長を期待できる資質・能力を入学者選抜において見抜いたとも考えられる。

また，卒業時の大学に対する満足度は，大学でどれだけ資質・能力を養ったか，大学でどれだけ積極的に様々な活動をしたかが影響していること，満足度は入学区分には関連していないが，学生時代の諸活動には関連が見られることが明らかになった。

この入学区分と学生生活における活動と卒業時の満足度の関連こそが多様な入試の意義だと考える。AO学生に対する教員の評価として，さまざまな個人的感覚の意見を耳にする。AO入試がもつ選抜の性格上，学力を問われず入学してきたというイメージから，資質・能力が劣る学生層といったマイナス評価が強い。しかし，本稿の分析結果から，卒業時にAO学生の資質・能力が他の入学区分に劣るという結果は一切読み取れない。AO学生は，教育の効果が高く，積極的にさまざまな活動に取り組み，満足度が高い傾向にある。卒業生の満足度は，大学の教育機関としての評価として，重要な指標であると考える。卒業生の満足感は，大学の教育環境に大きく反映されているはずである。大学にとって，AO学生の存在は，大学の教育機能のよりよい循環をもたらしているといえるであろう。

（アドミッションセンター　講師）
（アドミッションセンター　教授）

【参考文献】

富永倫彦・林寛子（2008）AO入試１期生の卒業時における資質・能力―学生の自己評価と指導教員による評価―『大学入試研究ジャーナル』No.18

山口大学アドミッションセンター「大学進学時の状況に関する調査報告書」18年度版

山口大学アドミッションセンター「大学進学時の状況に関する調査報告書」19年度版

山口大学アドミッションセンター「卒業時の実態調査報告書」18年度版